彼女のレベルは65

梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼女のレベルは６５

【Ｎコード】
Ｎ２４９３Ｔ

【作者名】
梅

【あらすじ】
ＶＲＭＭＯＲＰＧが浸透した社会。当然廃人とかチートとかオタクとか俺ＴＵＥＥとか沢山居るけど、現実も楽しい主人公サクは、のんびりというよりむしろ亀進行でゲームを堪能中…だったのだが、ある日を境に他のプレイヤー共々ＶＲＭＭＯＲＰＧの世界からログアウトできなくなってしまった。というかここは本当にゲームの中？それとも似た世界？ええい、明日は大事なプレゼンがあるのに！冷静なんだかズレてるんだか良く分からない主人公がバグに泣き、フレンドと協力し、モンスターから逃げ惑ったりして頑張ってみる

お話。※主人公はチートでも何でもない、普通のプレイヤーです。
むしろ弱いです。

異変

「……明日、プレゼンがあるんだけど……」

この”世界”で如月朔夜（きさらぎさくや）が初めて発した言葉は、何とも現実味溢れるものでした。

●●●●●

ＶＲＭＭＯＲＰＧ――《Ｅｔｅｒｎｉｔｙ　Ｏｎｌｉｎｅ》通称ＥＯ

より、リアルに。より、五感に近くゲームがプレイできる仮想体験型ゲーム。

サングラスに似た目と頭部を覆うタイプのヘッドセットと、左右の人差し指へ指ぬきのように差し込む３つの機器を使用して、人はゲームの世界を身近に、そして気軽に体験できるようになった。

世界で初めてこの画期的なゲームが日本のゲームメーカーから発表されると、当時はＰ○３が何台も買える程に高価だった機器が一

瞬で飛ぶように売れて、購入が遅れた人は入手するまでに数ヶ月時間がかかった、と当時の新聞で取り上げられていた。

発売されて7年が経つ現在では、機器は更に改良&軽量&安価でよりプレイしやすく、幾多に及ぶアップデートと行き届いたＧＭの管理体制で日本は勿論、世界でも最大級の人気とシェアを不動のものとしている。

ＥＯが出る前は、オンラインゲームとかＰＣゲームといったものは、とりあえず引きこもりとかニートとかオタク的な人達がやるものだと大体思われていた。

それが現在では、堂々と上司が「俺は昨日レベルが１０も上のモンスターを一人で倒した」とか何とか自慢気に言っていても、偏見の目が飛んでこない時代だ。

便利である。取引先のお得意様ともゲームの話で盛り上がれるので、実に会話に困らない。

といった訳で、朔夜がＥＯを始めたきっかけは興味というよりも仕事上の不純な動機が半分は絡んでいた。あとは、一年前に自分用のパソコンを購入した際、笑顔の素敵な店員からおすすめされた事が残り半分。

ついついほだされて、一緒にＥＯスターターセットを購入してしまったが、丁度今月でプレイ一年を迎える事からして、元々ファンタジー系のＲＰＧゲームが好きだった朔夜には相性が良かったらしい。

ただ、仕事がある為朔夜は廃人ではない。

現在のレベルも、レベル上限１５０に対し朔夜は６５だ。これは、同じ時期くらいに始めたフレンドが皆１００レベルを超えている事

から、かなりのまったり進行だという事が分かる。

ゲームは楽しいが、寝る間を惜しみ休みを返上してまで入り浸る気はない。

買い物にだって行きたいし、美味しいものを食べに出かけたいし、新刊の本だって読みたい、疲れたら早く寝ないと肌に毒だし。

そこそこに現実（リアル）も楽しんでいたのだ。

ただ、今日は就寝までの数時間を欲しい防具の為にモンスターを倒して金策しようかと、ヘッドセットを装着した。

●●●●●

――《Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　Ｅｔｅｒｎｉｔｙ　Ｏｎｌｉｎｅ》――

暗い視界に、鈴の音に似た音色と煌く青の文字が躍る。

もう何度も見てきた光景は、それでも現実（リアル）と幻想（ゲーム）との違いを知らせる境界線のようで、未だに朔夜は胸が弾む。

《Ｐｌｅａｓ　Ｓｅｌｅｃｔ　Ｐｌａｙ　Ｎａｍｅ　＆　Ｐａｓｓｗｏｒｄ？》
――プレイヤー名とパスワードをどうぞ――
「Ｐｌａｙ　Ｎａｍｅ　”サク”　Ｐａｓｓｗｏｒｄ　”＊＊＊＊＊＊＊＊”」
《Ｖｅｒｉｆｉｅｄ．．．．．．Ｇｏｏｄ　ｌｕｃｋ！》
――認証しました……幸運を！――

無事に認証を済ませると、輝く青色の文字が激励を送ってきた。
それからすぐに視界が再び黒一色に塗り潰され、一瞬だけ機器が触れている部位にピリリとした刺激を感じる。それから一瞬で黒から白に視界が反転して――

朔夜は、レベル６５プレイヤーの”サク”としてＥＯの世界に降り立った。

●●●●●

ＥＯの世界は広大だ。
度重なるアップデートと拡張を繰り返し、今やマップは数千にも及ぶと言われている。
そんな中で、サクが目を開けた場所は前回最後にログアウトした

場所と同じ、《魔法都市リベイラ》の競売場前だった。

モンスターを倒して獲得したアイテムは街のＮＰＣに販売もできるが、各都市に設けられた競売に出品すると他のプレイヤーが任意の金額で購入してくれる。もちろんその時のＥＯ内物価や供給具合によって売れたり売れなかったりという事もザラだ。

――ピコンッ！

先日ログアウト前に出品しておいたアイテムが売れているかどうか確認しようとしたサクの耳に、軽い電子音と共に視界の端へウインドウ欄が出現した。

ミヤコ：お、サクじゃん。やっと入ってきたね！まってたぞーっ

サク：やっほー！一昨日インしたけど…そういやミヤコとは話してなかったね。

ミヤコ：ちょーど離席してた時にインして、戻ってきたらもういないんだもんー。サクのイン時間短すぎ！

サク：あは、ゴメンー。

フレンドからの連絡であると気付くと、サクは慣れた手付きで手元に出現した電子キーボードを叩き、返事を打ち込んでゆく。これは、１：１と呼ばれる個別チャットで、離れたプレイヤー同士がそ

の名の通り１：１で会話をする際のものだ。
フレンド同士でなくても、１：１を行いたい相手の名前が分かっていればチャットを送る事は可能なため、ちょっとした相談事とかお誘いだとかにも利用されている。

ミヤコ：それで？今日は何すんの？レベル上げなら手伝おっか？

サク：んー、レベ上げも兼ねた金策かなあ…そろそろ防具を買いなおさなくちゃって思ってたから。あ、でもミヤコは今日イベントでしょ？一人でも行けるから大丈夫だよー、ありがとね！

ミヤコ：はっ、しまった忘れてたわ…じゃー、イベ終わってまだサクが金策やってたら、私も合流するね。リベっちも暇そうだったらひっぱってくよー！

サク：おお、それは助かる！私の眠気がきてなかったら頼みますw

ミヤコ：らじゃー！それじゃねーん！

ミヤコは森の人（エルフ）の女性型でプレイしているフレンドの一人で、半年程前に知り合った。
出会いと言えば、街道沿いのモンスターと一人（ソロ）で戦っていたら、実はもう一匹いました的な流れで絶体絶命！なところを助けてもらったのが始まりだった。

それから、何が気に入ってくれたのかレベル１５０上限に到達しているミヤコは、低レベルのサクにフレンド申請をしてくれて、こうやってちょくちょくクエストを手伝ったりだとか、レベル上げの

手助けを申し込んでくれたりだとか、サクが装備できそうな武器をプレゼントしてくれたりだとか、ちょっとしたコツを教えてくれる。
武器防具のプレゼントに関しては、悲しいかなレベル差がありすぎて金銭感覚がちょっと麻痺しているらしく、とんでもないレア品をプレゼントされそうになってから丁重にお断りしているが。

欲しくない訳じゃない。だけども、あんまりにも価値がありすぎてサクはどうしても受け取れなかったのだ。チキンな私を許してください。

人懐っこくて明るいフレンドを思い浮かべながらチャット欄を視界から消すと、サクは競売場で売れていたアイテム分の報酬を受け取り、自らのステータス欄を視界の右側へと出現させた。

Ｎａｍｅ：サク
Ｒａｃｅ：Ｈｕｍａｎ　♀
Ｌｅｖｅｌ：６５
Ｊｏｂ：Ｈｅａｌｅｒ
ＳＪｏｂ：Ｍａｇｉｃｉａｎ

ＨＰ：１２３０／１２３０
ＭＰ：２５４０／２５４０

Ｍｏｎｅｙ：３２４，２１０ｋ

「んー、ざっとあと１０万ってとこかなあ…」

サクの種族は人間（ヒューマン）の女性型、職業は回復、補助魔法に特化した《

白魔導師(ヒーラー)》だ。
今回の金策は、白魔導師の防具である法衣(ローブ)が欲しいのだが、競売で安く出品されていたとしても、サクが狙っているものは２０万はする。
現段階で買えない事もないのだが、他にも消費アイテムなどの購入を考えると懐に少々余裕があった方がいい。

これが前衛職だったら手近なモンスターをボコボコにして金策が出来るのだが、完全に後衛職のサクは攻撃力が低い為、一匹あたりに掛かる時間が長く、自分よりもレベルの低いモンスターでも苦戦する。つまりソロでのレベル上げ、金策共に最初から最後まで苦労する職業であり、ある程度別の職業を経験した玄人向けの職業だと言われていた……のだが、当時攻略サイトなんてものを知らなかったサクは単なる憧れから白魔導師を選択した。

レベル上昇が余計にまったり進行となったのは、これも原因の一つかもしれない。

「一人だし、無難に羊の毛皮でも……」

比較的サクとレベルが近いが、特殊攻撃が無いため比較的倒しやすい通称”羊”のモンスターを思い浮かべると、軽く頷いて転送魔法(テレポート)を唱えようとした。

全く唐突に、現在ＥＯにログインしている全プレイヤーに、ＥＯ運営からの緊急チャットが表示されたのは同時だった。

《いつもＥｔｅｒｎｉｔｙ Ｏｎｌｉｎｅをプレイいただき、ありがとうございます》

《１０分後に緊急メンテナンスを実施いたします》

「え…マジ？うわーついてない……」

バグか、通信障害かがあったのだろうか。

普段運営が行き届いているＥＯは半月程前から予告されるアップデートでのメンテナンス以外、急を要するアップデートは殆ど行われない。サクも一年の間に数度経験しただけだが、ゼロという事では無いので、今日は運が悪かったらしい。

《現在、Ｅｔｅｒｎｉｔｙ Ｏｎｌｉｎｅをプレイ頂いている皆様は早急にログアウトをお願い致します》

《なお、時間までにログアウトが完了していないプレイヤーの皆様は自動的にログアウトされますので、ご了承お願い致します》

緊急メンテナンスは大体数時間に及ぶ事が多い。

今日はもう金策を諦めて寝よう。競売に居た他のプレイヤー達も口々に文句を言いつつ、ログアウトを行おうとそれぞれ動き始めて――。

Ｅｔｅｒｎｉｔｙ Ｏｎｌｉｎｅの世界は、一瞬で闇に包まれた。

異変（後書き）

チート？なにそれおいしいの？…な主人公です。本当にありがとうございまｒｙ

良く有る設定ですが、前から書いてみたかった内容です。お暇つぶしにでもなれば…。

異変（2）

「……あれ？」

サクはまだ、ログアウトの手続きを行っていない。

それなのに今迄立っていた《魔法都市リベイラ》ではなく、ＥＯにログインする時のような、真っ暗な空間に放り出されてしまった。

「バグ？にしても…弾かれないし、なあ……」

例えばメンテナンス等で、ログアウト時間を過ぎてもプレイしているプレイヤーが居た場合、ＥＯ運営によって強制的にゲームから現実（リアル）へと戻されてしまったり、或いは回線の接続状態が悪くダウンした事等を、プレイヤー間では総称して”弾かれた”という。

ただ、そんな時はすぐに《接続できませんでした》という警告文と共に、意識が現実へと戻るものなのだが。

そもそも、まだログアウト時間まで１０分程あったはずだ。

時間オーバーだったら分かるが。運営さんや、ちょいと気が早いのではないか？

せっかちな男は嫌われるぞ。いや、運営陣が男だけとも限らないけど。

そんな事を考えていたら、遥か彼方にぽつん、と光の点が一つ生まれた。

それがどんどん近付いてきて、やがて視界が黒から白に――塗りつぶされる。

ちょっと早いけど、珈琲でも飲んで今日は寝よう。

見慣れた自分の部屋に”戻る”べく、眩しい白からサクは目をゆっくりと閉じた。

●●●●●

――ごうっ！

全く以って唐突に、朔夜は嵐の真っ只中へ放り込まれたように、全身を強風に叩きつけられた。慌てて目を開こうとするが、風圧が強すぎて開けない。

瞼を瞑っていても分かる程に、鮮烈に瞳を焼く強い光は太陽だろうか。

しかもなんだか天と地の感覚が無いような、これってジェットコースターが垂直に落ちる時みたいな……どうにかこうにか、薄目を開けた朔夜の目に飛び込んできたのは……。

とっても素晴らしい青空と、遥か眼下に広がる緑の大地でした。

「な――……う、ひょええええ――！？」

スカートが捲れてパンツが！ではなくて！
落ちている。テレビでしか見た事の無い、スカイダイビング中のように正しく高度数千メートルな空から物凄い勢いで地上とキスするべく絶賛落下中だったのだ！

ああ、おとうさんおかあさん朔夜は先に逝きます。
親不孝者でごめんなさい、三途の川で石を積みながら待ってるね。
現実逃避を行って、ふっと意識がアチラの世界に羽ばたいていこうとしたのを留めたのは、先程から激しい風に叩かれてバタバタと揺れる朔夜自身の格好だった。

法衣（ローブ）と、《白魔導師（ヒーラー）》職だけが着る事の出来る専用装備《祈りの絹衣》、ブーツやら装飾品（アクセサリー）やら他にも色々とあるが、これらは全てＥＯ内でプレイヤー”サク”が使用している装備だった。
つまり、朔夜は未だ”サク”としてＥＯ――《Ｅｔｅｒｎｉｔｙ Ｏｎｌｉｎｅ》にログイン状態だという事だ。

ならば、これは何かのイベント？
緊急メンテナンスが行われようとしている、こんな時間に？

ＥＯの時間軸は１２時間で一日計算となる為、現実（リアル）では一日に二回朝・昼・晩を繰り返している。ただ、サクがログインした時は夜だった筈なのに、どういった流れでか空高くから落下していて見える限り、時間帯は真昼。
視界が黒一色になってから１０分も経過していない筈なのに、こ

れはおかしい。
これもイベント（？）の一つなのか、それともバグなのか。
どちらにしても、サクはプレイを始めて一年で初めて運営に恨みを覚えた。
高いところは嫌いじゃないけど、お陰で高所恐怖症になりそうです。絶対ＧＭコールしてやる。
風が目に当たって痛い。余りにも現実的過ぎる感覚に疑問を覚えはしたが、目下この現状をどう打破するかが問題であり、段々と視界に迫ってくる地上にサクの心臓は鷲掴みにされた心地で、喉をひくっと震わせた。

ＥＯ中に於いて、サクのモットーは出来るだけ死なない、死なせない、だ。

死んでしまったら基本的に一番最後に登録した街へ送還され、経験地と所持していたアイテムを幾つかランダムで失いはするが、何度でもやり直せる。
ただ、アイテムを一揃えするのも四苦八苦する白魔導師のサクにとって、死ぬという事は非常にマイナスであり、矢張りＨＰが０になった瞬間の気持ち悪さも良いとは言えない。
だから、今の現状も「落ちて一回死んで、街からやり直す」という考え自体がサクの頭の中には無かった。「どうやって助かるか」という考えだけで一杯一杯だったのだ。

しかしながらそうは思っても、白魔導師に”空を飛ぶ”という能力(スキル)が都合良くある訳も無く、サポート職業として習得している黒魔導師(マジシャン)にもそんなものはない。

これはあれか、運営が「お前ちょっと死ぬ回数少ないんじゃね？大丈夫？」とか何とか有り難迷惑な親切心を発揮したのやもしれぬ。

全くもって余計なことをしてくれたものだ、と虚ろな視線で地面を見ていたサクは、ふと自分の真下にある場所が、何時も地図で見ている場所と一緒だという事に思い至った。

《魔法都市リベイラ》

一体どうなっているのか皆目検討も付かないが、どうやらサクは突然のブラックアウトを経て、リベイラの競売場前の遥か上空に飛ばされたらしい。

無駄な運営力(チート)を使ってくれるものである。だが、サクが落ちる場所が”都市”なら残り短い時間で行う事は一つだった。

「《救難援助(ヘルプ)》！」

手早くメニュー画面を呼び出し、迷う事無く選択する。

都市や、初心者エリアと呼ばれる低レベルプレイヤーが狩りを行うフィールドは、ＰＫが出来ないようにプレイヤー間の攻撃や回復等一切の行動が無効となる。ただ、プレイヤー自らが救難援助と呼ばれる行動(アクション)を選択する事で、他のプレイヤーは自分の能力(スキル)を使用出来るようになるのだ。

これによって、フィールドから都市に逃げてきた対象の回復であったり、状態異常を治したりする事が可能となる。

リベイラはＥＯの中でも《七大都市》に数えられている為、昼夜を問わず誰かしらプレイヤーが居る筈だ。誰でもいい、この信号に気付いて助けて下さいお願いします。

ぐんぐんと近くなる、リベイラの競売場前にある大噴水の鋭利な装飾に貫かれる未来が見えてしまう。思わずと顔を青くさせたサクの体が急にグン！と横から引っ張られて思わずサクは蛙が踏まれたような情け無い悲鳴を上げて目を瞑った。

「なんで上から人が……大丈夫、デスカ？」

助かった！《救難援助》が届いたらしい。

戸惑いながらも、サクが落ちないようにしっかりと支えながら抱いてくれている低い声の持ち主にまずは礼を言おうと目を開けたサクは、驚いているその人物や、同じく《救難援助》を受け取ったらしく何事かと集まって来た他のプレイヤー達が更に驚くような悲鳴を上げて、アイテムボックスから分厚い魔導書（武器）を手の中に取り出すと、問答無用で横っ面を思いっきり殴りつけた。

助けてもらった衝撃で、法衣（ローブ）が捲り上がり、見えていたのだ。

白い下着が。
これは正当防衛である！

異変（2）（後書き）

評価、感想、アドバイス等いただけますと嬉しいです^^

困惑

「……ほんっとーにごめんなさい！」
「や、ダメージとかくらってないし、大丈夫」

晴れ渡った青空から墜落よろしく、《魔法都市リベイラ》に降ってきたサクは、現在”命の恩人”へ絶賛土下座……をしようとしたら全力で止められたので、膝へ額が付きそうなくらい頭を下げている。

今サクが居るのは、落下地点であった噴水のすぐ傍に設置されたベンチである。座って謝るなんて無礼な事は出来ないので、先程魔導書（白魔導師の武器）でうっかり殴り付けた人物の隣に立って何度も平謝りしていた。

所詮は幻想（ゲーム）の世界なのだ、パンツが見えたくらいで取り乱して恥ずかしい。

しかも、２２にもなって生娘のような悲鳴を上げた気が……ああ情け無い。

ばちこーん、と小気味良く恩人を殴り飛ばしたものの、幸運な事にサクは弱くはないが強いとは到底言えない６５レベルであり、職業の白魔導師（ヒーラー）の攻撃力は紙のように貧弱であった。その為、吹っ飛ばされた張本人と言えばダメージはゼロだった事が唯一の救いだろうか。

助けてくれた人を瀕死にさせる白魔導師なんて、冗談でも笑えない。

修行が足りぬぞサク！と自分を叱咤したところで、「ホントに大丈夫だから！」という声が鼓膜を震わせて、サクは恐る恐る顔を上げた。怒ってない？怒ってない？

「ほら、隣座りなよ」

「……ありがとう、おじゃまします」

良かった、どうやら本当に怒っていないようだ。

何て心の広いプレイヤーだろうか！私だったら恥ずかしい格好に縛り上げて《魔法都市リベイラ》のマップ中で一番目立つ場所にぶらさげてや……いやいや。

脳内で広がった放送禁止な映像を無理矢理に掻き消すと、少しだけはにかみながらサクは恩人の隣へ腰掛けた。

「俺は人間（ヒューマン）の白騎士（ナイト）でハヤト、君は？」

「えと、私はサク。　人間（ヒューマン）の白魔導師（ヒーラー）です……助けてくれて、ありがとう」

淡いグリーンの瞳は優しい色だが、ちょっと吊りあがっていて、短く揃えられた金髪と精悍な顔付きをしている。あとは１８５ｃｍくらいはありそうな長身に、全身を包む白銀の甲冑が威圧感すら与えているが、気さくに声を掛けてくれるあたり、どうやら人懐っこい性格らしい。

サクが自分の職業を告げると、ちょっと意外そうに目を見開いて

から、すぐにくしゃりと表情を崩した。

「へー、装備がそれっぽかったからもしかして、って思ってたけど、白魔導師がメインかー。　珍しいなー！てことはベテラン？βからのプレイヤーとか？」

「いやいや、これが初キャラです。　始めて丁度一年かな」

「は、マジ！？　初キャラが白魔導師とか……サクってチャレンジャーだな」

チャレンジャーでも何でもありませんとも。

思わず言いかけた言葉を飲み込んで、サクは消化不良気味の曖昧な笑みを浮かべた。

自己紹介などでサクが自分の事を言うと、大体彼のような反応をされる。

白魔導師というのは、数ある職業の中でも唯一回復魔法、弱体魔法、補助魔法と三種の魔法が使用出来るのだが、如何せん”一人では何も出来ない”とすら言われている何とも残念な職業だ。

その上、今では無数と言って良い程存在するＥＯ攻略サイトの悉く（ことごとく）に”初めてのプレイヤーにオススメ出来ない職業ベスト３”なんぞランキングされているのだ、当然白魔導師を選択する人間が減るのは必然だろう。

言ってしまえば、不人気職業ワースト３に入る。

攻略サイト。

そんなものがあるなんて、一年前の私は知らなかったのだ！
白衣の天使的なアレって素敵とか、私の癒しであなたをごにょごにょとか一人で盛り上がってチョイスしちゃったんですう！とは、恥ずかしくてとてもじゃないが言えない。

「そ、それより、ハヤトさんは白騎士なんだ。　ってことは、さっき助けてくれたスキルって《引き寄せ》？」
「そうそう、あんまり使う機会無いスキルだけどさー、覚えてて良かったわー」

白騎士（ナイト）は一撃必殺のスキルこそないが、物理防御力・魔法防御力に関しては数ある職業の中でも文句無しの一位に入る職業だ。常に戦闘の最前に立ち、《威圧》と《挑発》を駆使して敵の攻撃を一手に引き受け、味方が敵を倒す為の時間を作る”歩く要塞”。

そんな白騎士の固有能力（スキル）に、《引き寄せ》と呼ばれるものがある。
これは、万一白騎士以外の味方に敵からの戦意が向いた場合、そして白騎士が距離などの問題ですぐに盾となれない場合、味方を自分の元へ”引き寄せ”る事で現状打破を狙えるものだ。
ただ、常に戦況が動く戦闘時では、味方の居る位置を完全に把握した段階で無いと寧ろ（むしろ）敵に囲まれたりする可能性もあったりと、使い勝手が中々に難しい。

これを習得しなければ白騎士として困る、という事も無い為、スキル自体を習得していない白騎士もいるようで、下手をしていたらサクの未来は、この白騎士の腕の中ではなくて、噴水の装飾に串刺しだったかもしれない。

ハヤトさんが居てくれて本当に良かった。経験地とアイテムロストは免れた！

サクの中で、彼に対する好感度パラメーターが振り切れる程上昇したのを知ってか知らずか、「呼び捨てでいいよ」と、ちょっと照れ臭そうに笑うハヤトに、尚の事サクの好感度は振り切れた。
ええい、この良い子ちゃんめ！座布団五枚くらい追加してやる！

「にしても、何で空から降ってきたんだ？」
「いやあ……私にも何が何だか。　緊急メンテナンスがあるってチャットに出たから、ログアウトしようとしたらいきなりブラックアウトして気付いたら空で……」

話していたら無性に腹が立ってきた。サクは軽く眉を寄せると、不満満載の顔で愚痴を零し始めたが、軽く掌を向けて静止させたのはハヤトだった。

「ちょい待ち。　サク、何時の話してんの？」
「……え？　いつって、まだ１５分も経ってないけど……あ、そういえばメンテナンスは？」

先程までの人懐っこい笑みは消え、酷く真剣なハヤトの表情がそこにあった。
戸惑いがちに首を傾けるサクから視線を逸らさない侭、まるで自分に言い聞かせるように軽く唇を湿らせると、ハヤトは一気に言い切る。

「緊急メンテは始まってない……サク、落ち着いて聞けよ。　そのチャットが流れたのはＥＯの時間で一日前だ」
「――……は？」

今のサクは、傍から見たら鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしているに違いない。

何度意味を理解しようとしても、さっぱり意味が分からずに、サクは困惑を滲ませてハヤトの瞳を見上げたが、そこにある疲労感と拭えぬ虚脱感を湛えた弱い笑みに言葉を失ってしまった。

「俺も、その緊急チャットを見てからログアウトしようとしてたんだ。　で、急にブラックアウト……ココまではサクと一緒だな」

「う、うん……」

「で、だ。　その直ぐ後に”所属国”に設定してたココ、《魔法都市リベイラ》に飛ばされて――それからリアルだったら半日、ココだと一日以上経ってんのと……」

おかしい。何かが、軋む音を立てて崩壊し始めている。

サクがほんの数十分で経験した事は、ハヤトにとってそうでは無かったというのか？それとも、単純にサクが眠気に負けて”寝落ち”状態だったと考えたとしても、この状況が何か良く無い状態である事くらい分かる。

それを知ってか知らずか、ハヤトは深い溜息混じりに呟いた。

「誰も、ログアウトができねーんだよな。ＧＭコールも無理」

……。

「……はい？」

今度こそサクは、ポカンと口を空けた間抜け面をハヤトに心置きなく披露した。

困惑（後書き）

漸くサクが異常に気付き始めました…遅w
評価、感想、アドバイス等いただけますと嬉しいです^^

現状

訂正しよう。

サク、こと如月朔夜(きさらぎさくや)が、現在自分が置かれている現状を把握した上で、一番最初に言った言葉が「明日はプレゼン」云々であると。

●●●●●

「ログアウトできないって……そんなバナナー」

「古っ！疑うなら、メニュー開いて見てみろよ、マジだから」

いくらハヤトや、その他大勢と時間の感覚が違うっぽくて、ついでに空から落下してきたといっても、流石にそんな冗談には騙されないぞ。

だってほら、メニュー画面を開いて、下の方にあるログアウトボタンをタッチすれば15秒くらいで現実(リアル)に戻れるのだから。

……。

「……あの、ハヤト」
「んー？」
「ログアウトボタンがないんですけど」
「……だから言ったろ？」
「ログアウトボタンはいずこ！？」

通常、メニュー画面を開くと視界の右手側にステータスやアイテム、フレンドリストといったメニューリストが１０個程並ぶ。その下部にある筈の、現実（リアル）へと戻るログアウトボタンが奇麗さっぱりと無くなっている挙句に、一つ項目が無くなってレイアウトが崩れないように、ご丁寧にもメニューの配置まで若干変わっていた。
試しにログアウトボタンが存在していた場所に触れてみるが、当然何の反応も無い。

そうだ、ＧＭコール！

一縷の望みを賭けて、サクはメニュー画面から緊急メニューを開く。
これは、ＥＯ内でバグ等による緊急事態が起こった場合、運営に連絡（コール）すると直ぐに緊急チャットが返って来て、直接会話が出来るものだ。
バグだかミスだか知らないが、連絡が付けばすぐに何らかの対応をしてくれる筈である。

誰もコールをしないなら、私がやろうじゃないか。空から落っことされた恨みもあるし、というか寧ろそっちを叩いてやる。
何とも自分主義の考えでＧＭコールボタンに触れようとしたサクの動きが止まり、たっぷり一分程時間を空けて再びハヤトに問いただす声は、酷く弱弱しかった。

「……ハヤト」
「んー？」
「ＧＭコールボタンがないんですけど」
「だから、言ったろ？」

何故か、「オ――マイゴ――ッド！」と叫びながら、嘆き悲しむ神父様の姿が脳内再生された。
ああ、何日か前に見た映画のワンシーンだ。印象に残ったからなー。
と、自分の記憶力とナイスタイミングさにほっこりしている場合では無いのだ！

ログアウトが出来ない。
ＧＭコールが出来ない。

つまり、明らかな異常事態であるにも関わらず、それを解決出来る筈の人達へ連絡を取る手段すら、ここに居るプレイヤー達は取る事が出来ないのである。

いってしまえば、ＥＯに閉じ込められている状態も同然だ。

当然として、ＥＯにログインしている間も時間は経過している為、この侭では……徹夜。
いやいや徹夜も何も、ハヤトは既にＥＯ内で一日以上が経過していると言っていなかっただろうか？つまり現実（リアル）では１２時間は軽く経っている？

「あ、明日、大事なプレゼンがあるんだけど……」
「……あー……」
「私の昇給をかけた、プレゼン……」
「……なんでかしんねーけど、時間がズレてるみたいだし、サクの”明日”って、多分”今日”だと思う。　まあ……ど、どんまい？」

ああっ、的確な指摘をありがとう！
知らない間に15分が12時間以上になっているわ、空から落ちることされるわ、その上仕事をすっぽかした扱いで私は上司に怒られる挙句、給料アップも無しという事ですね！まあ素敵！
駄目だ色々と死にたい。というか私の12時間は何処。
不満を言いたくても言える場所がない以上、如何ともし難い為サクは急な疲労感と虚脱感に襲われ軽く項垂れた。

「でも、サクってすげーよな」
「……うぬ？」
「あんま驚いてねーじゃん？最初、皆この事に気付いた時、大パニックになって今みたいに落ち着くまでかなり掛かったからさ」

いえ、これでも非常に驚いて、混乱して、脳内は混沌（カオス）な感情で一杯です。
余りの衝撃できっと顔が無表情になっていて、そう見えないだけなのかもしれない。
サクは乾いた笑いを浮かべると、先程から根気良く話を聞いてくれているハヤトに向き直った。

「もう何ていうか、何から驚けばいいのやら。　とりあえず、人生初のスカイダイビングに喜ぶべき？」
「あれは俺もビックリしたわー。　なんだろな、演出……なワケねーか」

「あれが演出なら、全員空から落ちれば良いと思う」
「いやあ……遠慮する」

ですよねー。私は選択権すら貰えずに、放り出されましたけどね！
余程剣呑且つ、胡乱な目をしてハヤトを見ていたらしい。ちょっと唇をヒクつかせると、ハヤトは巨漢に似合わず、素早い動作で勢い良く首を振って拒絶した。

「今は落ち着いてるみたいだけど、やっぱりパニックに普通はなるよね」
「……だな。　俺もリア友と合流してなかったら、絶対パニくってた」

サクとハヤトが座っている噴水のある場所は、《魔法都市リベイラ》のほぼ中心に当たる場所だ。
噴水を囲むようにして石畳の大広場があり、広場にはＮＰＣが食べ物や《合成》《強化》に使用するアイテム等を販売している店がずらりと並ぶ。そして、一人では倒せない敵や、一緒にイベントに参加してくれる人を募集するパーティ募集掲示板がある為、自然とプレイヤーはこの広場に集まってくる。

今も、サク達以外のプレイヤーが広場には、ざっと見ただけでも数十人で存在していた。
ハヤトから説明される迄、サク自身が現状を把握し切れていなかったせいで周囲を落ち着いて見る余裕が無かったが、なるほど。言われてみれば、皆どこか疲れたような顔をしていた。
当然と言えば当然である。ハヤトを含め、他のプレイヤーは既に、ＥＯ内から出られなくなって１２時間以上が経過しているのだから。

人間というのは不思議な生き物で、例えばゲームが大好きな人に

「そんなに好きならずっとやってていいよ」と言って、本当にやらせると何時かは飽きてやらなくなる。
逆に、「やるな」と言うと無性にやりたくなってくる。
つまり、捻くれているのだ。

そんな人間が自分の意思でＥＯから出られなくなった、と知った時。
人は、醜い感情を惜しげも無く晒した事だろう。
この”異常”がスカイダイビンクからの時間トリップなサクは、初めて自分の時間トリップに関してだけ感謝した。何せサクは一般ピープルである、周囲が取り乱しているのに、自分だけ冷静になるとか無理だ。
そこまで考えたところで、ふと浮かんだ疑問にサクは目を瞬かせた。

「……あれ、リア友と一緒じゃないの？」

そう、確かハヤトは”リア友”と一緒だと言っていなかったか？
リア友とは、現実（リアル）での友人を指す。お互いの顔や本名を知っている間で一緒にプレイしている友人がハヤトには居た筈だ。しかし、今はハヤト一人だけ。
まさか、空から落ちる際にサクヤが出した《救難援助（ヘルプ）》を受け取り、その侭リア友と別れてしまったのではあるまいか。
そんな懸念が顔に出ていたのだろう、ニッと笑顔を作ると、平気だと言わんばかりにハヤトは肩を竦めて見せた。

「ああ、へーきへーき。　フレンド登録してるから何時でも連絡取れるし、大体アイツが一人にされたからって泣くようなタマじゃないって」
「な、ならいい……の、かな？うん」

リア友さんとやらは恐ろしい人なのかもしれない。
笑顔なのに、ちょっとハヤトの顔が引き攣り気味なのは、見なかった事にしておこう。

「でもさー、実は俺もちょっとこの状況にイラついてたから、サクに説明しててちょっと落ち着いたわ。　面白かったしな、白いパン」
「今すぐ記憶から抹消してください」

もう少し白魔導師（ヒーラー）のレベルを上げて、物理攻撃力をつけておくべきだった。
仄かな殺意を両目に宿してサクはハヤトを睨み付けると、「冗談だって！」という焦った声で両手を左右へ必死に振る姿に、一先ず溜飲を下げた。
うむ、寛大な心で許してやろうではないか。

「面白かったのは確かだし、サク、フレンド登録しようぜ」
「え、いいの？」

ふざけた言動はともかく。
助けてくれた事といい、友好的な言動といい、ハヤトは良プレイヤーだ。

ＥＯには、日本だけで無く、海外にも膨大なプレイヤーが存在する。
悲しい事だが、人が集まればそれだけ良識（マナー）に欠けたプレイヤーが現れ始めるのも必然であり、親切に見せかけてプレイヤーキラーを行い装備を奪ったりする者だって実在する。
そういった警戒も含めて、通常サクはある程度交流した人としかフレンド登録を行わず、自分から申請もしない。だが、一年に渡っ

てＥＯをプレイしてきたサクとて人を見る目くらいは培ったつもりだ。
ハヤトは信用できる。珍しくサク自身から申請を行おうとしていた為、ハヤトからの提案は願ってもないものだった。

「じゃあ、お言葉に甘えて。　これからよろしくね、ハヤト」
「こちらこそ！よろしくな、サク」

精悍な顔に浮かぶ、悪戯っ子のような笑顔が何とも微笑ましい。
現実（リアル）の”ハヤト”も、きっとこういう風に笑うのかもしれない。
ハヤトが自分のメニュー画面からサクを選択し、フレンド登録申請を選ぶと、すぐにサクの視界に淡いブルーの文字が明滅して出現した。

《フレンド申請　Ｎａｍｅ：ハヤト　Ｌｖ．１４６》

自分のレベルが６５だという事が今更に恥ずかしくなって、サクはフレンド申請受理へ添えていた手を一瞬停止させた。なにこれレベル高いんですけど。
いや、フレンドとはレベルではない！心を通わせた者同士がうんぬん。

《フレンド申請が受理されました》

何度経験しても、フレンドが増える瞬間というのは何とも言えない嬉しさがある。
ゲームの中であっても、其処には確かに人間関係が存在し、フレンドというのは所謂一つのお互いがお互いを認め合っている証拠だとサクは考えているからだ。
誰が好意を持っていない人と、チャットを交わし、一緒にパーティを組みたいと考えるだろうか。

だからこそ、早速ハヤトの名前をフレンドリストに確認するべく、いそいそとメニュー画面を呼び出していたサクは非常に緩んだ顔をしていた。だが、フレンドリストを開いた状態で、サクヤは凍りついたように動きを止めた。

「え、何？どうした？」
「……ハヤト。　フレンドリストってちゃんと機能してる？私以外も入ってる？」
「は？……え、うん。　フツーにあるけど」

「解(げ)せぬ……！」

言い方が古いとか、別ゲーの影響受けてるとかそんな事はこの際どうだって良い。
ハヤトの名前は、確かにフレンドリストへ追加されている。
だが、それだけ。

確かに、他のプレイヤーに比べてサクのフレンドは多くは無い。
それでも、十数人の名前があった筈のフレンドリストは、今登録したばかりのハヤトを除き、”真っ白”だった。

「ちょ、サク……その顔マジで怖い」

ハヤトが若干引いているが、知ったこっちゃないのだ。
今、サクの顔は般若のようになっているに違いない。

現状（後書き）

評価、感想、アドバイス等いただけますと嬉しいです！

光明

成人女性に顔が怖いとか何とか聞こえた気がしたけれども、聞き返したら「サクさんは超美人です！」と言っていたから気のせいであろう。いや、現実（リアル）の顔とは若干異なるのだが、深くは言うまい。

少々一悶着はあったが、サク自身が現在巻き込まれている現状を確認する為にも、軽く咳払いをして、脳内で言葉を整えた。

さて、現状把握と参りましょう。

「ブラックアウトから、スカイダイビングして、ついでに時間もトリップしてみた後に、ログアウトもＧＭコールも出来なくて、その上フレンドリストは真っ白で、私の昇給もパァな訳ですが」

……うわ、もうなんか、自分で言ってて泣けてくる。

この短時間で、一体何故こんな波乱万丈人生を送る羽目になっているのだろうか。いや、人生じゃなくて半分以上はＥＯなのだけれども。

微かに唇が戦慄くのを何とか抑えつつ、サクは、表情だけは神妙な顔をしてみせた。

「ハヤトとリョウさんのお陰で、フレンドリストについては落ち着きました」

「やー、俺はなんもしてねーからなー。やっぱリョウってすげーよなー」
「ううん、ハヤトも代わりに1：1してくれなきゃ出来なかったよ、ありがとう」

そう、この”異常”が始まってから新しく登録したハヤトの名前を残し、何故か初期化されてしまっていたサクのフレンドリストは、現在のところ何とか本来数の半分程を取り戻していた。

実は、ここまで友人（フレンド）の名前を取り戻す迄にも、衝撃的（ショッキング）な事実が判明してしまい、危うくサクは灰になりかけた。精神的に。

それが余りに涙を誘ったのか、「ああ、無情…！」と儚い涙を流して悲しみに打ち拉がれるサクを救ったのは、ハヤトと”リョウ”である。いや、半狂乱気味になってハヤトの首へヘッドロックをかまし、ハヤトがリョウに1：1でヘルプを求めていた気がするが、きっと若気の至りとかサクの夢の中に違いない。

サクのフレンドリストに関する異常（バグ）は、”真っ白現象”に留まらなかった。

フレンドの名前くらい、リストに無くてもサクは記憶している。その為、最初こそ般若顔…訂正しよう、唖然としてしまったのは確かだが、良く考えてみればサクからフレンドへ1：1チャットを送信し、連絡を取り合えば良い。のだが。

どうやらサクはつくづく今回の異常に巻き込まれたプレイヤー達の中でも、ＥＯの悪意とも思えそうな程、バグに愛されているらしい。

１：１がサクからフレンドへ送れないのだ！
いや、正確に言うとプレイヤーネームを打ち込み、チャットを打ち込んで送信する事は出来る。しかしながら、すぐさま《送信できませんでした》のログが表示され、どうあってもサクからチャットが送信できない。

別段と、ＥＯにログインする度フレンドの誰かと常に行動していた訳では無く、どちらかと言えば”誘われたら”行く事もある、程度であった。他の者から見れば少々淡白にも見えるやもしれぬ。だが、リストに登録していた一人一人が、フレンドになるまでの出会いがある。
冒険であったり、馬鹿話に花を咲かせたり、或いは相談に乗ってもらったり。
名前の一つ一つは、サクにとってどんなレア装備やアイテムよりも重く、代えられない大切な宝石にも似たものだった。それがコレである。絶望と落ち込みっぷりは、推して知るべし。

何とも言えない空気に光明を差したのは、見知らぬ名前からの１：１だった。

●●●●●

――ピコンッ！

状況に似つかわしくない、軽い電子音と共に視界の端へウインドウ欄が出現する。

リョウ：どうも、初めまして。そこのバカハヤトの保護者です。

「……ハヤトのお母さんから1：1がきた」
「はあ？ああ、リョウだろ？さっき言ってた俺のリア友だよ、アイツなら何か良いアイディア浮かぶかなーって思って、俺がサクにチャット送るように言った。　って、せめて父親じゃねーのかよ！」

どちらにしても、ハヤトの保護者的ニオイがする。きっと苦労人に違いない。
何故か勝手に親近感を抱きつつ、呆れた顔をするハヤトを他所に少々遠い目をしたサクは、気を取り直すと手元に出現した電子キーボードを叩いた。
というかハヤトさん。保護者のくだりについてはツッコまないんですね。

サク：初めまして、リョウさん。

リョウ：さっき《救難援助（ヘルプ）》出してた人で間違い無い？

サク：はい、私です。先程はお騒がせしました……。

リョウ：いや、無事なら良かった。何で俺が君に1：1してるか

は、ハヤトがちゃんと説明してれば分かってると思うけど、ある程度の話はハヤトから俺も聞いてる。フレンドリストが初期化されて、そっちから1：1が送れない、で間違い無い？

サク：そうそう！私からフレンドに連絡を取りたくても、取りようがなくて……。

リョウ：オッケー。ひとまず、俺から君へ送った1：1はこうやってやり取り出来てるから、フレンドじゃなくても”受け取ること”自体は機能してるみたいだな。

そうだ、あれ程サクから送れなかったチャットが、今易々と出来ているではないか！

サクは思わず、感嘆の溜息を吐き出した。ハヤトのリア友だという”リョウ”なる人物と、サクはまだ会った事は無いが、会話を進めるにつれてハヤトが信頼しているのも分かる気がする。

ハヤトが白騎士（ナイト）の前衛職にぴったりなら、きっとリョウは後衛職……しかもパーティ時等は司令塔の役割を果たせる人物に違いない。性格も反対そうだが、きっと其れが逆にバランスを取っているのだろう。

リョウ：じゃあさ、次は君がハヤトに1：1を送ってみて。フレンド登録してたよな、確か。

サク：了解しましたー、確認するのでちょっとお待ちを。

はて？今、サクからは1：1が出来ないと確認したばかりでは無

かったか。
ハヤトにチャットを送信したところで、またエラーメッセージが出てしまう筈なのだが。疑問は湧くが、何か考えあっての事やもしれぬ。サクは軽く首を傾げながらも素早くリョウへ返信すると、その侭自分のフレンドリストを開き、ハヤト宛の１：１を出現させた。

サク：ハヤトー、このメッセ届いてる？

「お、きたきた」

ハヤト：オッケー、大丈夫！

「「……おおー……」」

どうやら、ハヤトもリョウと別に１：１で現状を報告していたらしい。
サクからのメッセージがハヤトに届くと、二人して思わず拍手してしまった。
軽い感動を覚えながら、サクは先程よりも軽快に電子キーボードを叩く。

サク：メッセージ送れました！すごいです、びっくりしました！

リョウ：てことは、フレンド登録した人には君からもメッセージが送れるみたいだね。

サク：あ、なるほど。今私のリストにあるのがハヤトだけだから

……。

リョウ：そういうこと。これで対処も分かったね、そこのバカハヤトを存分に使って、君のフレンドと連絡を取り合えば良いと思う。

サク：え、いいんですか……？

リョウ：バカだけど代筆するくらいは出来るだろ。こき使っていいよ、アイツにもメッセージで言っておくから。じゃ、何かあったらまた連絡して？

サク：はい！リョウさん、ありがとうございました！

リョウ：どういたしまして。

《フレンド申請　Ｎａｍｅ：リョウ　Ｌｖ：１４０》

神様や、神様がおわしめすぞ！

登録しているフレンド以外のプレイヤーへ、サクからメッセージを送れない事を見越してか、直ぐにリョウからフレンド登録が申請された。普段のサクなら、実際に会った事も無いプレイヤーとフレンド登録をする等言語道断ではあるが、ハヤトの友人である事、危機的状況を救ってくれた英雄（ヒーロー）である事から、今回は寧ろ大歓迎であった。

レベルが高かろうと、何だろうと、この際遠慮なんてしないのだ。

《フレンド申請が受理されました》

すぐにフレンドリストを確認すると、リョウの名前もリストにきちんと反映されていた。
これで、サクからはハヤトとリョウ、二人に対してのみではあるが、サクから1：1のメッセージを送る事が出来るようになった。
だが、未だにサクのリストは空白部分ばかりで些か寂しい。

対処法はリョウが教えてくれた。ならばやる事は一つである。
サクは満面の笑みを湛えると、どうやら警戒しているらしいハヤトへと向き直った。

「ハヤト、私の為に手伝って？」

否、間違えた。
リョウの言葉に甘えて、正確には死ぬ程ハヤトをこき使った。

●●●●●

本来なら余り歓迎すべき事では無いのだが、この際目を瞑ろう。
サクがフレンド登録をしていたプレイヤー名をハヤトへと教え、”代理人”の名目で其々へと1：1を送ったのだ。
勿論、文中にサクの名前があっても、知らない人物からの連絡等誰が頭から信用するだろうか。そう、疑われる事も念頭に入れ、サクとフレンドしか知りえない情報をさり気無く文中に盛り込んで貰う事で、疑い混じりであっても各フレンドからサクへメッセージが

届く様に取り計らい、現段階で何とか半数程はフレンド再登録が完了していた。

根本的なバグが解決した訳では無いが、思いつく限りのフレンドにハヤト経由でメッセージを送信している為、今返事の無い人物達も何時かは何らかのアクションが返ってくる筈だ。

全員とはまだ連絡が取れていない。だが、先刻の衝撃に比べれば落ち着いた心地で、サクは最初よりも増えたフレンドリストへそっと掌を重ね、ゆっくりと撫でた。

「後から俺宛に連絡来た分は、サクにメッセージ送るよう伝えておくから」

「うん、ありがとう。何だか二人に助けてもらってばかりだね」

「困ったときはお互い様だろー。　それにサクは貴重な白魔導師(ヒーラー)だし、ゲットしておいて損はない！」

何だ、私は希少動物扱いか。

ううっ、と軽く呻くと面白そうに笑われた。逆効果でしたかそうでしたか。

だがまあ、スカイダイビングからハヤトには助けてもらいっぱなしなので、ある程度の事には目を瞑るとしよう。大人には寛容さも必要である。

「サクは、これからどうすんだ？」

サクが人生初のスカイダイビングに意図せず放り込まれた際は、雲一つ無い青空だったのが、今では茜色の太陽が地平線に沈もうとしていた。

これ程に時間を忘れて、ＥＯに居たのは初めてかもしれない。

居た、というのは正しく無い。度々メニュー画面から確認はして

いたが、矢張りというか何というか、相変わらずログアウトボタンとＧＭコールは回復していない為、サクを含めてＥＯにログインしていたプレイヤー達は、現在進行形で現実（リアル）に戻る事が出来ていない。

何故か、他のプレイヤー達に比べてタイムラグの後にＥＯへと放り出されたサクも、既にこの状況が単なるバグでは無い事を薄々感づいていた。

ハヤトから共有してもらった情報、実際にサクが見て感じた事。

ここは、サクが一年に渡ってプレイしてきたＥＯであり、ＥＯと異なる世界。

自分の身体はどうなっているのだろう。

一体何人が同じ状況なのだろう。

此処はゲームの世界なのか、それとも違う場所なのか。

焦燥が無いと言えば嘘になる。

だが、幾ら焦りや苛立ちを誰かにぶつけて、何かが解決する訳では無い。

それなら、道を見つけよう。目を瞑るのは、いつでもできる。

すっきりとした顔でサクが告げると、一瞬ぽかんと口を開いた後、ハヤトは大きく笑い出した。

「そうだね、冒険の続きをしにいこうかな。　死なない程度に」

「ははっ！そりゃいいや！」

喜びがあって、悲しみがある。
ここは、もう一つの現実(リアル)。

光明（後書き）

かなりさっぱりした女性主人公（笑）
今回はシリアス（なのか？）な感じでしたが、次話はまた主人公がオタオタし始めるかと思います。
評価、感想、アドバイス等いただけますと嬉しいです！

模索

さて、と《魔法都市リベイラ》を目的も無く歩いていたサクは、軽く首を傾げて周囲を見渡した。

サクは今一人だ。サクを助けてくれたハヤトとは別れている。
というのも、いくらフレンドになってくれたとは言っても、余りハヤトの行動を縛り過ぎるのも如何なものかと、サクが遠慮したからなのだが。

いやはや、嬉しいけれど驚いた事に、サクはハヤトの”クラン”に誘われたのだ。

クランというのは、簡単に言ってしまうと気の合う者同士が複数人で作る、チームのようなもの、とでも言えば良いか。その場で簡易に行うパーティはごく一時的なものだが、クランは抜ける意思が無い限り、所属し続けられる。
クランに所属する事で、一人（ソロ）では使えなかったクラン専用の貸金庫や倉庫が使用可能となり、クランメンバーであれば共有する事だって出来る。クランメッセージもあるので、わざわざ1：1を一人一人にしなくても、現在ログインしているクランメンバーへ一括してメッセージを送れる。

そして、どうやらハヤトは全く以って驚き以外の何物でもないが、クランリーダーを務めているそうなのだ。副リーダーはリョウだと

聞くと、成程と納得してしまったが。
誘ってもらったこと自体は非常に嬉しかったが、サクは丁重に断った。
……いや、まあ一人で歩いている今はやっぱり入っておけば良かったとか、今すぐ１：１でお願いしようとか色々と煩悩が擡げ（もたげ）ているけれども。

サクは今ギルドに所属していない。
別段、人間関係が苦手とかハブられたとかトラブルがあったとか、そんな事では全く無くて。

居心地が良すぎたんだよなあ。
地平線に沈もうとしている茜色の夕陽が眩しくて、少々目を細めながらサクは一人小さく笑った。
サクが所属していたクランは、リーダーの引退を以って二ヶ月ほど前に解散した。
クランメンバー全員が皆良い性格で、もちつもたれつ、を見事に体現したクランであり、例えば誰かが喧嘩をしても必ず誰かが諌めて解決させる。レベルの上下で態度が変化する事なんてまずありえなかったし、サクの知らない事は教えてくれ、逆にサクが教える事だってあった。
ＥＯの事以外の現実（リアル）の話も随分とした。元々ゲーム内で自分の事を話すのは気が進まなかったサクも、ついついポロリと話してしまうくらい、人数は決して多くなかったが、気の置ける仲間達だったのだ。
どうしても今後ログインが難しくなる、という事でリーダーの引

退が決まり、最初こそ誰かがクランを引き継げば良い。そんな話もあったのだが、同じクランには出来ない事を皆理解していたからこそ、最後の日は皆で遅くまで騒いで、花火を打ち上げたりして、馬鹿騒ぎをして別れたのだ。

きっと、EO内でもあのクランは随分良心的なクランだったのだと、今現在一人のサクは切々と思う。

余程低レベルでない限り、ソロで行動しているプレイヤーはクランに誘われる事が多い。

サクも、今迄何度もクランに誘われていたし、フレンドからも「気が変わったら」と有り難い事に何人からか勧誘されていた。

だが、どうしてもあのクラン以上の場所が見付けられずに、サクはあれからずっとソロで行動している。

そんなこんなで、ハヤトの嬉しい申し出を断ってしまったのだが。

ちょっとだけ残念そうに笑って、「何時でも待ってるからな」何て言われた日には、嫌いだから断った訳じゃないから良心がちょっと、いやかなり痛むではないか！

思わず、やっぱり入れてください何て言いそうになる自分を叱咤するのがどれだけ大変だった事か……少し前の自分を褒め称えながら、サクは目に付いた酒場へと足を踏み入れた。

●●●●●

人間、腹が減っては戦も出来ぬのである。

「おおー…」

ハヤトや、復旧したフレンド達とのやり取りから、情報収集の追いついていないサクもある程度の現在置かれて居る状況を把握していた。つもりだった。

リベイラの街を歩いている時も薄々感じてはいたが、しかしこうして実際に目の前の光景を直視すると驚くものがある。

先程からサクはテーブルに座った状態の侭、目を白黒させていた。

「ほら、嬢ちゃんは酒飲まねえのかい？」

「馬鹿！そーんな細っこい身体に強ぇ酒なんて飲ませて何するつもりなんだよ！」

ばしーん！と耳に痛い音を立てて、おじさまその1がおじさまその2へ豪快にチョップをかます。それに逆上して、やんややんやと騒ぐ酒場は、サクが予想していた以上に”酒場”のイメージそのものだった。

試しに、索敵（サーチ）を行ってみる。

索敵は、自分以外のプレイヤーやＮＰＣ、或いはモンスター等が何処に居るか、一定の距離内で確認する事が出来る能力（スキル）……なのだが。

結果、サク以外のプレイヤーは3人しかいない。それ以外の、十数人に及ぶ老若男女は驚くことなかれ、全てＮＰＣなのだ。

ＮＰＣは、Ｎｏｎ　ｐｌａｙｅｒ　ｃｈａｒａｃｔｅｒの略称で

あり、プログラミングされた事だけを行う存在。
通常、ＮＰＣは此方から話し掛けない限り話さないし、決まった事だけしか言わない。だというのに、今サクの前でどんちゃん騒ぎを繰り広げているＮＰＣ達は、どう考えてもプログラムされた内容だけでは無く、サク達プレイヤーと全く一緒の人間に見える。

「注文は何かするかい？」
「それじゃあ…おばさんのオススメで」
「おや、嬉しい事言ってくれるねえ。　任せておきなよ！」

如何にも”肝っ玉母さん”的な女性が友好的な笑顔を見せると、つられてサクも笑みを返した。ううむ、本当に普通の人間と話している感覚しかしない。
今迄のＥＯでは考えられなかったやり取りだが、サク自身としては此方の方が良いかな、何て思う。同じことしか答えてくれない相手より、意思のある会話をする方が断然楽しいではないか。

だが、どうやらサク以外のプレイヤー達は、そうではないらしい。
サクの座るテーブルとは、丁度幾つかのテーブルを挟んで反対側にあたる一角を陣取り、自分達がアイテムとして持っていたらしい、林檎や山葡萄、干し肉等をテーブルの上に乗せてヒソヒソと何やら相談していた。
時折周囲へ向ける視線は気味の悪いものを見る目で、決してＮＰＣ……いや、もうこうなったら人間だ。周囲のＮＰＣを人間だとは認めていない。

ハヤトからの情報で、最初この事を聞いた時は勿論サクも驚いた。
だが、元々ファンタジーな小説やゲーム等を昔から好んで居た為、何というか、どちらかというと不謹慎ながらワクワクしてしまったのだ。

ＥＯの世界だが、何処か歪なこの現状。まるで、ＥＯをプレイしていたプレイヤー達が、そっくりそのままＥＯの世界に似た此処に異世界トリップしてしまったような。

現実（リアル）に戻りたくないという訳ではないが、現状、メニュー画面を開いてみてもそこにログアウトボタンやＧＭコールが復旧していない以上、プログラムに詳しくもないサクは、どうする事も出来無い。

ならば、鬱々陰鬱と隅っこで腐っているより、いっその事気持ちを切り替えて過ごした方が楽しいではないか。大体、隅に居るあの三人組プレイヤーは美味しい食事があるのに、何故そんなものを食べてるのか。毒なんぞ今更入ってないだろうに。

「はいよ、おまち！　今日はベア肉のトマト煮だよ。　オマケで大盛りさね！」
「ありが……お…多い…」
「若いんだから、それくらい食べな！」
「はひ」

多い。若いからなんてレベルじゃねーぞ！
テーブルへ豪快に置かれた器は、シチュー皿というより最早サクの顔がすっぽり入る程のどんぶりとか、サラダボウルくらいの陶器であり、その器にこれでもかと注がれた中身が湯気を上げて美味しそうな香りを漂わせている。

ぱっと見は、ビーフシチューといったところだろうか。
一口では食べられそうに無い程大きく切り分けられた肉と、ジャガイモ、ニンジンっぽい野菜がどれも豪快な大きさで盛られている。まあ、肉が牛ではなくて、”ベア”と聞こえた事に関しては気のせいに違いない、うむ。

ええい、女は度胸！

「……おいしい！」

美味！想像以上に美味しい！

じっくりと長時間煮込まれた野菜の旨みと、肉の出汁が上手くスープに溶け出しており、ワザと塩味のみで整えた控えめの味が、余計に食材の美味しさを引き出している。

一人暮らしで料理もするサクである。そこそこ料理に関しては煩い自覚があったが、これは文句無しに美味であった。一緒にオマケで貰った、フランスパンを小さくしたようなものも、少々固いがスープに浸して食べると忽ち口の中で蕩け（とろけ）て無くなってしまう。

最初こそ食べきれるか疑問に思っていた量も、余りの美味しさに気付けば完食していた。

満腹になった腹部を軽く押さえ、至極満足気に目を細めて、ほうっとサクは吐息を吐き出した。

超美味でした、満足幸福極楽至極。

「お、良い食べっぷりだねえ」

「ご馳走様でした、凄く美味しかったです」

「嬉しいねえ。　作り甲斐があるよ、また食べにおいで」

勿論ですとも。この”異常”に関しては大歓迎です。

そう、本来ＮＰＣである人達が人間同然になっている事もＥＯでは有り得なかったが、ここ迄味覚があるのも異常な事なのである。
ＥＯが発売される前のβテスト時には、五感全てが現実（リアル）と全く寸分変わらない程のリアリティだったそうだが、ゲーム内での空腹や喉の渇き、或いは眠気、戦闘時の痛み等全てを採用した結果、現実（リアル）と幻想（ゲーム）の区別がつかず、特に戦闘に於けるショックで意識障害を起こし、病院へ運ばれるプレイヤーが相次いだという。

その為、ＥＯ内での五感はある程度抑制されている。
痛みは極軽い衝撃だけだし、勿論血なんて出ない。空腹や喉の渇きはＨＰが減った際に軽く感じるので、我慢できない程でもないし、確か、プレイ時間が現実（リアル）の時間で５時間程続くと強制的に一旦ログアウトさせられて、１時間はログイン出来ない仕様だった筈だ。

サクは強制ログアウトをされる程、長くログインした事は無いのだが。

そういった訳で、普通に空腹も喉の渇きも覚える今は、かなり異常な事態である事は確かだ。
基本的な地盤はＥＯの世界と何等変わらないが、こういった細々とした部分でＥＯとの違いが如実に現れている。マップ的には《魔法都市リベイラ》にあたる場所な為、此処には勿論モンスターはいない。だが、街や都市を一歩出れば、そこには多種多様なモンスターが存在するのだ。

そして、恐らく戦闘時には今迄以上に、多かれ少なかれ痛みを伴う。
これは、味覚の件からしても逃れ様の無い事実だろう。

参ったなあ。

満腹感の後にくる、軽い眠気に任せて瞳を伏せながら、サクはテーブルへ片肘をついてほうっと溜息を落とした。最悪、このリベイラから出ずに篭り続ける、という事も《調合》スキルを使用してちまちまとアイテムを作り、売ればそこそこに暮らしてはいけるだろう。

だが、サクにそんな気は全く無い。

ひとまず、連絡の取れたフレンド達と実際に会って、無事を確認したいというのが心内で渦巻いていた。しかし、それにはリベイラの外に出る必要がある。

都市の周辺は、初心者プレイヤーでも狩りがしやすいように、ある程度の低レベルモンスターしか出現しない。それでもサクが得た情報では、今迄と受けるダメージが違う以上、苦戦する事は否めない。

そして、サクは前衛職でも何でも無い、生粋の後衛職、白魔導師（ヒーラー）である。

一人でどのエリアまで行けるのか、甚だ疑問であった。

深く考えてしまうと、何時までたっても埒があかない。

サクよ、くよくよするのは自分らしく無いではないか。

「よし！」

聞くより実際に慣れろ、だ。

「とりあえず……」

今日はもう、寝よう。

年頃の女性には、十分な睡眠が必要なのである。

模索（後書き）

主人公は自分の欲求に忠実です。眠いんですw
評価、お気に入り登録などありがとうございます！気に入っていただけましたら、感想等宜しくお願い致します。

起床

少しだけ開けていた窓から、朝の冷たく心地の良い空気が室内へ侵入してくる。
小鳥の囀りと、何処からか漂ってくる香ばしい香りに、サクはさっぱりとした気持ちで目を覚ました。

今日は良い天気だ。
少し早めの電車に乗って、会社に着いたら屋上で珈琲を飲もう。
そして、昼過ぎからのプレゼンを絶対に成功させるのだ、昇給の為にも。

ささやかな幸せと、今後の目標を胸に秘めてサクは意気揚々とベッドから立ち上がった。
そしてその侭動きを止めて数十秒、窓の外へ向いていた視線がちょっと虚ろに、泣きそうに歪んで、虚無感に溢れた笑みを形作る。

「ですよねー……」

勿論、起床した時から分かってはいた事なのだ。
それでもやっぱり自分の妄想が膨らみすぎた夢だった、と終わらせてしまいたい位の出来事だった為に限界迄サクは見ないフリをしていたのだが。
窓の外に広がる景色は《魔法都市リベイラ》の街並み。中世ヨーロッパをイメージして作られているこの都市は、サクが住んでいる現実（リアル）の街とは似ても似つかなかった。

一度寝たら、”寝オチでした”で今の現状がすっぱりと解決するかも、等と淡い期待をサクは抱いていたのだが、何度窓の外や室内を見渡しても内装が変わった何て事は全く無く、起きて早々に押し寄せる疲労感に任せて、ついさっき立ち上がったベッドに仰向けで倒れ込んだ。

夜が明けても、ＥＯ――《Ｅｔｅｒｎｉｔｙ　Ｏｎｌｉｎｅ》の世界からサクはまだ抜け出せていない。

「やっぱり、駄目かあ……」

虚空へ手を差し伸べて、試しにメニュー画面を開いてみる。
だが、矢張りというか何というか、ログアウトボタンとＧＭコールが復旧している様子は無くて、サクは落胆した声を上げた。まじですかー。

暫く、悶々とした気持ちを整理するべくベッドに横たわった侭、天井の模様を眺めて居たが、軽く息を吐き出すと勢い良く立ち上がった。
その侭、室内に置かれている姿見の鏡前で全身を映して、マジマジと顔や身体を確認する。

鏡に映っているのは、白の下着を身に着けただけの女性である。
黒に近い紺色の髪は、癖の無い真っ直ぐなストレートで、腰に届く程のロングヘアー。薄い紫色の瞳に、真っ白な肌。ＥＯ内で朔夜の分身として作った”サク”の姿が其処にはあったが、どこかおかしい。

何というか、違和感バリバリなんですけど。
自分であって自分でない頬へ手を添え、軽く頬を引っ張りながらサクは眉を顰めた。痛い。
現実の朔夜が髪を染めて、カラコンを入れて、肌に白粉(おしろい)をはたいたらこんな感じだろうか。

種族自体は五種類だが、髪型から体型に及ぶパーツは数千以上にも及び、誰かと組み合わせが被る事等意図して行わない限り不可能、とすら言われている程だ。他のゲームに比べるとキャラデザインが圧倒的に豊富な事も、ＥＯの人気の一つでもある。
全く無からキャラクターを作る事も出来るが、サクは基本的に自分の身長や顔の造形を採用し、髪色や目等を多少弄った程度だ。
だとしても、睫毛の一本一本、肌の下に薄ら浮き上がる血管まではゲーム内に於いて必要ないし、何よりサーバーの余計な負担を軽減させる為にも、再現されていなかった筈だ――今までは。

それが今はどうだろう。
鏡に映る”サク”は現実(リアル)と似ていない。しかし、今までのＥＯのサクと何処か異なっていて、どうしても拭えなかったポリゴン的要素が全く無い。
何となく現実の朔夜を彷彿とさせる顔だし、睫毛や眉毛、産毛に渡るまできちんと存在している。正直言って気持ち悪い。コスプレしているみたいだ。

昨夜、寝る前にチラリと鏡を見た時は、室内が暗いから見間違えたのだろうと見て見ぬフリをしたが、流石に朝日の燦々と差し込む今は逃避のしようがない。
これも、現在進行形で起こっている”異常”の一つなのだろう。
朝から重くなる思考を払拭させる為、サクは軽く頭を左右に振る

と気を取り直すようにしてメニュー画面を開き、アイテムボックスに収納していた自分の装備を具現させた。
光の粒子を纏って、何も無い空間から現れた装備一式がベッドへ落ちる。うむ、どうやら着方は同じらしい。

ＥＯで武器や防具を装備したり、変更したりする際は現実（リアル）と一緒で着替える。
何故こんな仕様なのか、最初こそ首を捻ったものだが、今はこれのほうが良かったかもしれない。だって急にこんな服を着ろと言われても、着方分からないし。

サクは白を基調とした装備に手早く着替えた。
現在装備している装備は、無駄に布が多く肌の露出はかなり少ない。ＥＯの時は気にしていなかったが、踊り子（ダンサー）等の職業じゃなくて良かった、とサクは邪推していた。
だって、ビキニよりも際どい服が多いんだぜ……自分が着ていたら、と想像してサクは後悔した。絶対無理だ、ただの罰ゲームだ。

●●●●●

何度見ても、不思議な光景だとサクは思った。

サクは、昨日夕食を摂った酒場の同じ場所に座り、頬杖を付いて

室内を眺めて居た。
　といってもサクが寝ていた場所は、この酒場の二階に当たる場所なのだが。夕食を食べた後に、泊まる場所をと聞いたところ快く泊めて貰った訳である。

　ＥＯには自分の部屋、というものが最初からは準備されていない。ＨＰやＭＰが減った場合は、能力（スキル）を使うか薬を飲むか、あるいは街中に点在している宿屋で休む必要がある。ある程度レベルが上がり、資金が増えたら自分で部屋を購入して拠点にする事も出来るのだが、残念な事に購入費用は非常に高いし、定期的に維持費は掛かるしで、サクは専ら普段から宿屋か、野外の場合は自分の回復スキルを使用している。

　ＨＰが減っていた訳ではないが、やっぱり夜ってちゃんとお布団で寝たいし。
　そして、朝と言えば美味しい朝食であろう。

　目の前には新鮮な野菜のサラダと、こんがり焼けたフランスパン（らしきもの）、フレッシュジュースの朝食と、下手をすれば現実（リアル）の朝食より豪華やもしれない。

　それをつついている間にも、どうやら飲みすぎたらしくおじさまその１が土気色の顔をして、フラフラとカウンターに近寄りおかみさんから気付け薬らしいものを受け取っている姿は、何処からどう見ても普通の日常にしか見えない。
　だが、索敵（サーチ）をすると、酒場の中に居るプレイヤーはサクだけで、他の人達は皆グリーンの名前で表示されていた。即ちＮＰＣだ。

「お早うお嬢さん！　早いねえ、これから依頼でも受けるのかい？」
「お早うございます。　……依頼、ですか？」

昨日も声を掛けてくれた女性の声に、サクは軽く首を傾げた。
サクの知る限り、ＥＯに”依頼”というものは無かった筈だが。
国同士の大規模イベントか、パーティ、後はＮＰＣから受けられるクエストが主に経験地や資金を稼ぐ手っ取り早い方法である。

「おや？お嬢さんは冒険者だろう？噴水の所にある掲示板（ボード）は知らないのかな」
「掲示板……ああ、パーティ募集板のことかあ」
「うん？」
「あ、いえ、”依頼”は知ってますので、大丈夫です。そうですね、ちょっと後で行ってみます」

成程、どうやらＮＰＣの彼女達からして見ると、あの募集板は様々な依頼が集う掲示板だという認識らしい。最初は分からなかったが、言葉が違うだけで意味合い的には一緒な為、一先ず納得する事にした。

「そうかい、そうかい。　それじゃ暫くはココに居るんだねえ、良かったらウチを使っとくれよ！」
「はい！　あ、ご馳走様でした」

顔を綻ばせる彼女につられてサクも笑みを返すと、嬉しいお誘いにはしっかりと首を縦へ振った。美味しいご飯が食べられる場所なら大歓迎です、ベッドも寝心地良かったし。

元気な見送りの声を背に、酒場を出た。

連絡の取れたフレンド達と実際に会えれば、と思っていたが、パーティ募集板の周辺は以前から沢山のプレイヤーに溢れている場所だ。

ならば、より詳しい情報のやり取りが出来るかもしれないし、場合によってはパーティを組んでくれるプレイヤーも居るかもしれない。

まだ連絡の取れていないフレンドとばったり会えるかも――そんな、淡い期待も抱きながら、軽い足取りで昨日サクがスカイダイビングをした場所の落下地点に当たる噴水広場を目指し、歩き出した。

起床（後書き）

何だか今回は説明チックな話に…。

思案

《魔法都市リベイラ》は、中世ヨーロッパをモチーフに作られた七大都市の一つだ。

中世ヨーロッパといっても、勿論サクは生粋の現代っ子である為、本当の中世時代を知る訳も無いのだけれど。

イメージ的に言えば、イギリスだとかああいった何となくファンタジーっぽい場所の感じだろうか。

モンスターの浸入を阻む為に、都市全体がぐるりと高い城壁で囲まれていて、一定の場所に見張り台が設けられている。

そこには常に二人の兵士だか騎士だかが常駐し、都市内部と城壁の外に鋭い視線を投げている…というのが公式設定だったような。

まあ今は、サクと全く変わらない”元ＮＰＣ”の人間が交代で見張りをしている。

ちょっと頭上を振り仰いだサクは呆れてしまった。

何とも器用に、一人の青年が見張り台から買い物をしていた女性に声を掛けて居たのだ。

言ってしまえばナンパである。全く、仕事しろよ！リア充してんなよ！

サクも、現在進行形で仕事を休んでいる扱いだが、それはそれ、私のせいではありません。

よって無実、無罪。可哀想な冒険者その１でいいよねー。

何とも都合の良い考えに一人納得しながら歩いていたサクだが、角を曲がったところで見えてきた目的の場所――噴水広場の様子にはて、と首を傾けた。

「誰も、いない……？」

そう、何時ものＥＯであれば、昼夜を問わずパーティメンバーを募集する為に、レベルや職業を問わず沢山のプレイヤーで溢れ返っている広場に、誰もいないのである。

プレイヤーは最初、自分の分身であるキャラクターを作成した後、”所属国”を七大都市から一つ選ぶシステムになっている。都市といっても、一つ一つは其々国家と変わらぬ機能であり、時折開催される”所属国”同士の大規模戦闘等で、国家間のイベントバトルが催される。

どの都市を”所属国”にするかはプレイヤーの自由だが、此処《魔法都市リベイラ》を所属国にした場合ＮＰＣが販売している魔法スクロールを２０％割引された状態で購入できるというオマケと、丁度ＥＯの世界で真ん中辺りにある為移動等何かと利便性が良い事もあって、”所属国”とするプレイヤーが多い。多分ぶっちぎりの人口密度だ。

だからこそ、この噴水広場を始めパーティ募集板が設置された付近はいつもプレイヤーで溢れているのが常だというのに、見渡す限りプレイヤーと言えばサクくらいで、後はＮＰＣ（というか街人？）だけであった。

試しに募集板へと近付いて、募集内容を確認してみたが、悲しいかな一つとして募集が存在していなかった。なにこれ、超過疎ってるじゃん。

昨日、この頭上からサクが人生初のスカイダイビングを経験して、《救難援助（ヘルプ）》をした時には、ハヤト以外に十人前後のプレイヤーが様子を見に来てくれていた事を確認している。

たった一日でこれほど過疎るものなのか？いやいや、もしかして”異常”が解決して次々ログアウトしてるとか？

儚い希望に突き動かされて手早くメニュー画面を開いては見るが、やっぱりログアウトボタン諸々は回復した様子は無く、思わずサクは落胆も露に首をがっくりと落とした。

ううう、期待して損した！

こうなったら見つけたプレイヤーをひっつかまえて、事情を聞くしかない……と物騒な考えで周囲を見渡したサクの目に映ったのは、馬車の荷台に幌を掛けて果物等を売っている露天のおばあさんとなにやら揉めているらしい、一人のプレイヤーだった。

試しに《索敵（サーチ）》を行ってみるが、矢張りプレイヤーで間違いないようだ。

エルフの銃使い《ガンナー》、レベルは１０２。

確か、初盤は攻撃力が低く、近接に持ち込まれると苦労する職業だが、双銃（ダブルバレット）が覚えられるレベル９０台になると、途端に攻撃力も命中力も跳ね上がり、パーティに一人居るか居ないかで楽さが変わる、と言われていたような。

自分と違う職業なので細々した事はてきと……いやいや、曖昧に覚えているだけだが、サクの記憶だけでもこのレベル帯なら普通、パーティでウハウハしている事くらいは知っている。

それがどうやら露天のおばあさんを困らせているらしい。

ターゲットロックオン。

「ねえ、ちょっと聞きたいんだけど」

「ヒッ！？な、なんだ、プレイヤーか……」

銃使い《ガンナー》の背後から声をかけると、まるで幽霊と出会ったような恐怖一杯の声を上げられた。不本意だ、私はそんなに怖いのか？

ムッとして相手を睨み付けると、どうやらサクがプレイヤーである事に気付いたらしく、途端に安心したように息を吐き出した。にしてもこのエルフ、身長どれくらいあるんだろうか？サクは現実（リアル）と一緒で１６０センチに設定しているが、このエルフ、軽く１９０センチくらいはありそうだ。でけえ。

しかも、なんだか動きがおかしい。妙にフラフラしているというか、不安定というか、軸が通っていない軟体動物というか……海鼠（なまこ）を縦に置いたらこんな感じ？

とにもかくにも、サクがプレイヤーだと分かって話を聞く姿勢はあるらしい。

此方へ向き直るエルフ青年を見上げると、困った顔のおばあさんへチラリと視線を向けてから、サクは営業スマイルを浮かべた。

「どうしてそんなに食料を買い占めてるの？料理スキルでも上げる気？」

「あ、ああ、そうだ。さっさと上限まで上げて、マシな料理を食うんだよ」

「ええ？効果が、付かないのに？」

しめしめ、スマイル作戦は成功である。

ちょっとフレンドリーな口調になったエルフ青年に心の中でほくそ笑みながら、サクは心持ち可愛らしさを気掛けて首を傾けた。

マシな料理？ハヤトから教えてもらうまでサクも知らなかったが、

宿屋や酒場では出来立ての、それも非常に美味しい料理が食べられるというのに、それでも満足できないのだろうか？
確かに料理スキルを上げておけば、料理を作るだけでなく様々な効果を付与させる事は可能である。簡単に言ってしまえば、肉を食べると一定時間攻撃力が上がる、というように。
しかし、”異常”な状態に陥っているこのＥＯは、現在料理を食べたからといって、効果が発動する事は無いとフレンドとのやり取りでサクは情報共有を受けていた。
勿論、能力（スキル）を使用する事で様々な効果をアップさせる事はできるが、料理においては現実（リアル）と同様で、空腹を満たす行為そのものになっていた。

という訳で、今の段階ではぶっちゃけ料理スキルを上げる事に何の意味も無い。
お腹が空いたら、酒場や宿屋で食事を取れば良いし、持ち帰り（テイクアウト）すればいいのだから。
スキルを上限まで上げるというのは、かなりの労力と、単調な作業で寧ろ苦痛なのだが…それを、何も今しなくても良いだろうに、余程ドＭなのかもしれない。

「ちげーよ、ＮＰＣの料理なんて怖くて食えねーだろ。　ただでさえ、妙なコトになってんのに、食い物まで妙なモン入ってたらこえーじゃん」
「……はあ」

変なところで几帳面というか、潔癖症というか。
なるほど、昨日酒場でたむろしていた三人組のプレイヤー達も同じ考えだったのか。
いや、予め情報を得ていたサクならまだしも、いきなりこの状況に放り込まれて手探り状態な彼等からしてみたら、至極当然の事な

のかもしれない。

「それにさあ、ココの外に出たらモンスターばっかで何処にも行けねーし。　だから食材買い占めて、料理スキル上げすんの」

「へー……」

自分から質問しておいて何だが、最早サクはこのエルフ青年に何の期待も抱いていなかった。どうにも煮え切らないヤツである。ハヤトとかリョウにメッセージを飛ばして、聞いたほうが余程有意義な答えを貰えた気がする。

「パーティしないの？君、銃使い《ガンナー》でしょ？　絶対誘われる職業じゃ……」

「冗談じゃねーよ、あんな痛いの！妖精の尾も使えない、転送装置も使えないしでイザとなった時逃げらんねーし、こんな感覚じゃ戦うのだって大変だし」

「え」

サクは思わず聞き返した。何ですと？

妖精の尾はダンジョンなどの入り組んだ場所から野外（フィールド）へ一気に転送できるものであり、転送装置は都市と都市を繋ぐテレポートとでも言おうか。フィールドのところどころにも設置されており、”開通”さえ一度してしまえば、好きな場所へテレポートが出来る。

これは初耳だ。”異常”が発生してから、プレイヤー達も何が変わっていて、何が変わっていないのか把握している最中である為、また何かあるだろうとは思っていたが、まさかこの二つが使えないとは……正直言って痛い。

妖精の尾を使用すれば、いざとなった場合に逃げる事が出来るので死亡する確率を下げられる。そして、転送装置が使えないとなれば、移動は全て徒歩かもしくは騎乗動物を使ってになる……のだが。
ＥＯの世界は何せ広い。都市から都市へ移動するだけでも、これでは大変な労力だし、咄嗟に逃げる事も侭ならない。

「どうせバグか何かなんだろ、だったら危ない橋渡るより、ココで部屋買って篭ってた方が安全じゃん。　もういいだろ？邪魔すんなよ。　オイ！さっさと渡せよ！」

唖然としているサクを置いて、エルフ青年は捲くし立てると、恐る恐る大きな紙袋を差し出すおばあさんからひったくるようにして受け取り、乱暴に代価を払った。
そのままさっさと何処かへ歩いて行く背を追う気にもなれず、ぼうっと見送っていたサクに控えめな声が掛けられたのは暫く経ってからであった。

「ごめんね、お嬢さん。　もう売れるものがないんだよ……」
「あ、いいえ！大丈夫ですよ、おばあさん。　また今度買いに来ますね」
「すまないねえ……」

どうやらあのエルフ青年は、がっつり露天の品物を買い漁って行ったらしい。
困り顔でサクを見る露天のおばあさんへ、サクは慌てて首を振ると笑って見せた。その侭軽く手を振って露天から離れると、パーティ募集板のある噴水へと歩いていく。

とすん、と昨日ハヤトと会話した場所に腰を下ろし、軽く腕を組んだ。

思ったよりも難しい事になっているのかもしれない。確認するべきことが沢山ある。

ああもう、楽しく遊ぶゲームで、何故にこんな考えにゃならんのだ！

サクは何度目になるか分からない深い溜息を吐き出すと、虚空に手を翳してメニュー画面を表示させた。

フレンドリストを開くと、少し考えてから”ハヤト”を選択し、メッセージを送る。他のフレンドでも良いが、あいにくと今同じ都市に居るのはハヤトとリョウのみである。１：１の侭よりは、出来れば直接相談したい。

サクだって、幾ら成人していても中身は普通の女性である。

他のプレイヤー達と少々異常の始まりが異なっていて、ある程度耐性がついたといっても、やはり不安はあるものだ。だからこそ、直ぐに快い返事の文面を見たサクは、思わず表情を綻ばせて、待ち合わせ場所に行くべく、いそいそと駆け出した。

相談

「という訳なんだけど」
「まじかよー……妖精の尾と、転送装置(ワープポイント)が使えねーのは痛いなあ」

今、サクはハヤトとリョウのクラン拠点である、一件の家(ハウス)にお邪魔していた。

場所的には、《魔法都市リベイラ》の中で、噴水広場から伸びる大通りをちょっと脇に入った細い道沿いにある淡いグリーンを基調とした小さな一軒家。

えらくこぢんまりとしていて、クラン拠点と聞いた時には全員入らないんじゃないかと余計な心配をしたものだが、中に入ってみると長屋のような構造をしていて、存外に広い。

外装と同じ淡いグリーンと白、そして木のブラウンで統一された室内は落ち着きがあり、かなり居心地が良い。その長テーブルにサクとハヤト、そしてリョウが座って顔を合わせていた。

ちなみに、リョウとは先程初顔合わせだ。

1：1やハヤトとの会話からして、超優等生キャラを想像していたサクだが、あながち予想は間違っていなかった。

種族は人間(ヒューマン)、職業は隠密(シノビ)でハヤトとは真逆のように真っ黒な忍装束を身に纏っている。髪も瞳も黒だし、キリッとした顔つきではあるが全く違和感が無いあたりからして、どうやら彼も自分のフェイスや体型などは殆ど弄っていないらしい。

ぱっと見二人とも前衛職だが、隠密(シノビ)は状態異常スキルも使用出来

る為、ハヤトとは良いコンビなのだろう。羨ましいことだ。

「俺達もまだ、このリベイラから出ていなかったからな……この情報は有り難い」

「でもさー、移動がかなりめんどくさいよなあ……こりゃ気軽に他都市のヤツと会うの、難しくねーか？」

「うん、そうなんだよね……私も、転送装置（ワープポイント）を使って都市間は移動するつもりだったから、《転送魔法（テレポート）》と乗り物か、騎乗動物を乗り継いでになるかな」

サクの淹れたカモミールティーが優しい香りを漂わせている。

それを一口飲むと、サクはほうっと溜息を吐き出してから難しい顔をした。

白魔導師（ヒーラー）には《転送魔法（テレポート）》という能力（スキル）が存在する。

その名の通り、ある条件の元で場所から場所に一瞬で移動出来るというものなのだが、これはレベルが上がるに従って転送出来る場所が増えてゆく。

レベルも６０からではないと一番最初のポイントまでいけない。実際サクが今飛べる場所は一箇所だけなので、余り利便性は無い。

その為、代わりとなるものが騎乗動物だ。

これは各都市や要所要所の場所に貸し出し（レンタル）が出来るようになっていて、馬や巨大な鳥、豹のような生物などなど、長期間の耐久や足の速さで借りる事の出来る動物は多岐に渡る。

ドでかい羊だとか、ラクダもリストにあって、最早何屋なのか分からない時もあるくらいだ。

普通なら、初めて行く場所へは騎乗動物で移動し、各地に点在する転送装置（ワープポイント）に自分の情報を記憶させると、後は騎乗動物を使う必要

も労力も必要ない。
だが、現在の状態であればサクのような《転送魔法(テレポート)》やそれに類ずる能力(スキル)を使用出来ない職業の者は、ほぼ全員が徒歩もしくはこの騎乗動物での移動を余儀なくされているも同然である。

この広大なＥＯの世界で、毎回毎回の移動がソレなのだ。
特に、レベル帯の高いエリアだったり、レア品の出るエリアというのは総じて各都市から離れた場所にある事が多いし、都市間を移動するのも下手すれば一日掛かりとなれば、憂鬱になるのも仕方ない。
自然と三人の間には、溜息が重く停滞していた。

「……うじうじ考えててもしょーがねーか！出来ないもんを求めるなら、出来る事をやろうぜ！」
「相変わらずお前は単細胞だな」
「あ、ひでーっ」

三人の中では一番体格が良く、顔つきだって精悍なのに、ハヤトの言う事やることはリョウが呆れる程に何だか子供っぽく、微笑ましい。
だが、確かにハヤトの言う通り何時までもお通夜のように落ち込んでいたところで何も解決はしないし、悩むより挑戦してみる気概を溌剌(はつらつ)と持つ方が精神上にも宜しい。

「ふふ、本当に仲良いんだね」

これなら、精神安定のカモミールティーは必要無かったかもしれない。
少々温くなりはじめた液体を一口含むと、サクは小さな笑い声を上げた。

その途端に目を丸くするハヤトとリョウに、サクのほうが驚いてカップを取り落としそうになったのだが。

「な、何？私ヘンな事言った？」
「いや……なあ」
「……」

もの言いたげに視線を交し合うハヤトとリョウだが、その意図はさっぱり分からない。
だからと言って理由も話してくれなさそうなので、サクは都合良くスルーする事にして、次なる話題を振るべく唇を一度カモミールティーで湿らせた。

「まあソレはおいておいて。　私、”狩り”してみようと思ってるの」

何が安全で、何が安全でないのか。
この世界に突如として残されたプレイヤー達は、手探り状態で日々を過ごしている。
そんな中で現在のところ何が一番安全かといえば、しこたま食材の材料を買い込んで篭る準備をしていたエルフ青年のように、各都市から出ずに引き篭もる事だ。

でも、それが絶対に安全かと聞かれれば首を傾げるべく得ない。
食材だって通常ＮＰＣから買えるものが品切れになるなんて事は無いし、サクが寝食を過ごした酒場の人達から聞いた話では、公式上絶対にモンスターが入ってこない安全圏の都市内部にだってモンスターが現れる事があるそうで。それを聞いた時はなにそれこわいと思ったものだが、よくよく考えると確かに”普通は”そうだろう。
だから物見台だって設置されているのであって。

別段敵を倒してヒャッハーしたい訳では無いが、もしも今後そういう事がログアウトできるようになる前にあったとして、心の準備も何もない侭戦って――勝てるか、というと全力で勝てない自信がある。
ただでさえ、白魔導師（ヒーラー）は雀の涙くらいな攻撃力しか持っていないので、長期戦になって精神的なＨＰが削られるのは否めない。

それなら、今のうちに慣れておく方が良いのではないか。
いや、出来れば慣れたくないけど。郷に入れば郷に、処世術というやつですね。
もう一つ理由はあるのだが。

「え、マジ？サク一人で？」

ハヤトが驚くのも無理はない。
白魔導師（ヒーラー）のソロ狩りなんて、要領悪いし時間掛かるし、自分よりも低いレベル帯のモンスターを倒すのでいっぱいいっぱいだし…と、マゾゲー並みなのだ。
サクとしても、今まではフレンドに手伝ってもらうか、どこぞのクランに入れてもらって、レベルを上げるつもりだったのだが、結局クランへ入る前にこの状況。結局ソロ状態。
全く以って嘆かわしい。

「そんなにがっつり行く訳じゃないよ。　リベイラの外に出て、ちょっと狼でも殴ってみるだけだし……ほら、《惑わしの森》って林檎とか結構簡単に取れるし」
「嗚呼、成程な。　確かに今俺達が”どうなっているのか”を試してみるなら、ソレくらいが丁度良いか」

《魔法都市リベイラ》を囲むようにして鬱蒼（うっそう）と生い茂るエリアは、《惑わしの森》と呼ばれている初心者向けエリアである。
プレイヤーが出身国を《魔法都市リベイラ》にした場合、モンスターが出現する一番最初のエリアであり、大体にして相当レベル１～１０くらい迄のプレイヤーが狩りを行い、レベルを上げてゆく。

サクの職業柄、同レベルの他職業プレイヤーに比べると耐久力攻撃力諸々は悲しいものだが、流石に初心者エリアのモンスターに負けることはまず無い。
それに、《惑わしの森》には林檎やらベリーやらの果物（アイテム）がゲットできる為、大量に集めて《魔法都市リベイラ》で露天を開いているおばあさんにでも安く売れば、ちょっとした安定収入にもなりそうだ。
うんうん、一石二鳥！一人自分の考えを自画自賛して頷いていたサクだが、考え深げにリョウが頷いた後の言葉に目を丸くした。

「ハヤト、俺達も一緒に行くか」
「おー、いいなー！俺も家ン中でじっとしてるのいい加減ヤだし！」
「そりゃあ、私は大歓迎だけど……いいの？」

サクはソロプレイヤーなので誰に遠慮する事もないのだが、対する二人はクランを纏めるリーダーとサブリーダーという立場である。クランメンバー達とのやりとりだってあるだろうし、サクよりも大変な事もそれなりにあるだろう。
そのあたりを懸念してだったが、何ともあっけらかんとしたハヤトの言葉になるほど、と納得した。

「いやー、俺達クランのメンバーなんだけど、丁度イベントしようって《浮遊都市コルシュ》に集まってた時間帯でさあ……《魔法都市リベイラ》に居たのは、俺とリョウだけなんだよなー」

《浮遊都市コルシュ》といえば、此処リベイラからかなり離れた場所に位置する”七大都市”の一つだ。
コルシュとリベイラの間には《霊峰エクスル》を越えて行く必要があり、転送装置（ワープポイント）が使えない現在では合流はかなり難しいといえる。
クランメンバーと直に安否を確認出来ないのは大変だろうが、ハヤトとリョウの様子を見る限り特に問題はなさそうだ。

「なるほどね……よーし、それじゃあ早速行ってみようか！」

善は急げ、ものは試し！

そんな訳で、サクとハヤト、そしてリョウの三人は謎のバグが始まってから初めて、街の外に出るべく動き出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2493t/

彼女のレベルは65

2011年6月11日00時11分発行